

5. 向上訓練の受講者はなぜ基礎を学ぶと喜ぶのか

中小企業から公共向上訓練に⁵²⁾「基礎」が求められていること、その基礎が意味するものは在職労働者であるがゆえの特別の意味をもつことが前章まででわかった。

ところで、向上訓練の受講者、中小企業の従業員がなぜ「基礎」を学ぶと喜ぶのか、また、作業者にどんな変容がおきるのだろうか。この点について、中小企業主の声をかりながら、解釈してみよう。⁵³⁾

これは公共向上訓練の性格をきめていく上で極めて大切なことである。

第一に、理論的なことを正しく学び、「なぜそれが必要なのか」を知ると、作業者はその後に出会う事象に対して適切な処理が可能になる。

いわゆる「応用」ができるようになり、職場の先輩からいちいち指導されなくても自分の判断で仕事ができることにもなる。

これは基本的な原理の理解は「訓練の転移」効果があるという見解に通じる。

「溶接の基礎知識があって溶接するのと、ないですのとでは全然違う。技術的な判断を含めた技能の習得が必要であると思う。

基礎というのは自分がもう一歩先の判断をするときの、方向を誤らないための知識であると思う。一から十まで指示によって仕事をさせられるのではなく、その場で自分で判断して行動していくことが必要である。その際、基礎がないと、単なるカンにたよったり、昔、このようにやったから…ということだけで仕事をしてしまい、全々違った方向に仕事を進めてしまうこともある。

「こうやればこうなる」という法則があるわけだから、それをちゃんと知っていれば方向を誤らないですむ。この基礎ができれば、後は経験を積重ねればよい。」(Fuj)

第二に、基礎を習得することによって、ただ一般的な原理を把握するというだけでなく、自分自身で問題を解決しようという構えができる。⁵⁴⁾

「いろいろな機械加工をやっているのだけれども、ボール盤を自動化したいと思っても今まで手を出せなかった。シーケンス制御の基礎を学んだので、手を出せるようになった。チャレンジ精神、自分に関連するところをなおそうとする気がでてきた。それが喜びとなっているようだ。」(Sai 製作所)

第三に、基礎を学び、今まで気がつかなかった作業の原理的な裏づけをみいだすと、自分の能力に自信を持ようになる。⁵⁵⁾ ⁵⁶⁾

“これでよいのかな”という一種の不安感をもって作業する状況から離脱して、安心して、自信をもって仕事にむかっていけるようになる。

「今まで600回転で切削していたが、'切削理論'の基礎を受けてから800～1000回転にあげられることがわかって自信をもって作業をしている。今までは経験でしか作業をしてこなかったが、切削理論と結びつくと自信がでてくる。」(Tok 精工)

「いきなり現場で作業をしなければいけない。理論なしで先輩が“バイトはこうとぐのだよ” “このところはこの角度が一番切れるよ”とただ教えるだけである。なぜ、その角度が一番切削に適しているのかとか、しゃくりはどれくらい入れたらよいかなど理屈の上では知らない。そこを講習に行って理屈の上で、こういう角度に研げばよい、こうなって切り子のはげがよくてよく切れるのだとわかってきたときに、非常に自信になる。

ただ言われたように研いだのではなくて、理屈の上でも頭の中でも理解するということで仕事も一段とおもしろくなるのではないかと思う。

理論と実際との結びついたとき、自分の腕というものに自信がでてくるのではないか。どちらにしてもバランスがとれていないと、一種の不安というものがでてくる。」(chi 工業)

第四に、特定分野にかたよることなく、一定水準にまで巾広い基礎を知ることにより、生産技能者としてトータルな職業能力をもつことができる。

つまり、実務を通じて体得された技能が洗いなおされ、バランスの崩れた部分が補正されると'丸みのある'能力が持てるようになる。⁵⁷⁾

正式のやり方、標準的な作業を知ることとは何ものかの他との比較における自

分の技能の位置づけをすることになる。そして、その位置づけによって作業者の心に“共通性”“通用性”があるという意識が生ずる。⁵⁸⁾

「鉄工に勤めていても、ガス切断だけが仕事になってしまう人とある程度組立てもできる。あるいは原寸ばかり書いている、というように非常に専門化する。ゆえに一人前のような顔つきをしてもちょっとはずれるとわからないということがどうしてもでてくる。

他の部門をみて、丸い鉄工ができるように育てばそれはよいのであるがそうならない人間は安住してしまう。そこに安住してしまったことに気がつかないで年とってしまった人は不幸である。それなりの評価しか他からあたえられない。

そうすると、ある程度、客観的な評価がなされ、ある程度の年齢にいったところで、自分の能力の限界を客観的にさとって、基礎的なことを学びたすことが大切である。これができないとこまる。」(Iid鉄工)

第五に、生産現場の人は、一般に仕事を教えるのが「苦手だ」といわれる。ところが、作業の理論的な裏づけ、正しいやり方など基礎を学ぶと他者への伝達する能力が高まり、仕事が教えられるようになる。

また、基礎を学んでいる者は見ようみまねで仕事を学えた先輩からの仕事についての説明を理解しやすくなる。

「NC旋盤のプログラミングの基礎は職場内にNC旋盤の専任者がいるわけで、その人が教えられると思うだろう。ところが、周辺の人に教えるのはうまくいかない。ところが、向上訓練の研修でNCの未経験者がプログラミングの基礎を勉強した結果、その先のことは職場のものがとても教えやすくなった。」(Shi社)

中小企業の現場で基礎を教えるのは苦手であるとする理由には次のような点があろう。

① 生産現場には技能・知識においていろいろのレベルの作業者がいる。その作業者が何かを学ぼうとしたときにその人が保有する技能レベルを見ぬくことがむずかしい。つまり、学習レディネスが直観的に把握できないことである。

② “見よう見まねで「仕事をおぼえた熟練者はその仕事の理論的な裏づけを知らない場合が多い。”なぜか「が説明されないと学ぶ側の理解が充分にできない。

③ “教える技術「が体得されていないために、どのように教えてよいのか、わからない。特に、“なぜ「を説明するための手段、例えば、シュミレータ、各種試験機などを用いた指導の方式がわかっていない。⁵⁹⁾

以上のようなことで向上訓練受講者は基礎を学ぶことに喜びをみいだしていると思われる。要するに、公共向上訓練で基礎を学ぶことによって生産技能者が自律的、主体的に生きていく自信を得ていると言えよう。